

# 子どもと天体

塚田幸子

現在小学一年生の長女Mは、星を見るのが大変好きで、星座にまつわる伝説や星占いの本を愛読している。この子の二、三歳代には太陽や月、星との興味深い出会いや関わりがあり、それらの体験が現在の興味や関心の重要な素地になっていると思われる。

M 二歳三か月十七日、二歳三か月十八日、二歳四か月十三日、夜、月と星を見つけて喜び母に知らせに来る。

二歳三か月十九日 夜、月を見て「お月様食べちゃう」と両手にとって食べる真似をする。

二歳六か月十日 午後、昼間の月を見て「お月様！」

二歳六か月十八日 母が書き物をしている傍で「お勉強」と言っ  
て前夜見た月と虹を描く。

二歳七か月十一日 午後、公園でブランコに乗っている時、厚  
い雲の間から微かに顔を見せた太陽を見て「あれなあに？」と言  
う。「お天道様」と答えると「ふーん」と言う。

二歳十か月九日 母の帰りが遅かったので、泣いて母にだっこ  
する。母の膝に抱かれたまま母に絵を描いて貰って喜ぶ。「お天  
道様」「お家」「お花」の絵を描いてと言う。

二歳十か月十日 母と公園でブランコに乗る。「お天道様がニ  
ニコしてる」と言う。ブランコを降りて走り出し「お天道様と  
一緒に走ってるの」と言う。走って見ると太陽は本当に私たちと

一緒に走っているように見える。一番高い滑り台に乗ってMは「お天道様ノ」と何度も叫ぶ。大きなジャングルジムの中に入り、「お部屋」と言う。

二歳十か月十一日 朝、家の中に陽が差し込んでくるとMは「お天道様がお家の所に来たノ お天道様がニコニコしててでしよ」と言う。

二歳十か月十三日 夕方、買物に行く時、満月を見て「お月様ニコニコしてる」と言う。

二歳十一か月一日 夕方、買物の帰り道、三日月を見て「お月様って可愛いので、Mちゃんと遊びたいって」と言う。

三歳一か月〇日 久し振りに晴れた朝、目が覚めて居間に出て来ると直ぐに「お天道様、今日は」と言う。ベランダに出て「お天道様いらっしやい」と言っつて部屋へ入り、「お天道様2つ付いて来た」と自分の後を指差す。

三歳一か月二日 夕方、電車の中で「お天道様どこ？」と尋ねる。

三歳一か月十九日 夕方、いつもより遅い時間に買物に行く。もう暗いので太陽は見えないがMは「お天道様、後ろに付いて来てるの」と言う。母が「今日はお天道様はもういないの」だと言うと悲しそうなくやしそうな顔をして「お天道様はお家にいる

のノ」と言う。

三歳二か月〇日 電車の中で飽きて来て横になると夕陽が顔に当り「眩しい」と言う。「お天道様が『今日は』って来たのよ」と言うると本気で起き直つて「お天道様今日は」と深々と頭を下げる。あまりの真剣な表情に思わず笑つてしまふ。

三歳二か月十二日 夜、祖母と二人で銭湯へ行き、帰つて来ると母に「こんなに大きいお月様だった」と両手を広げて見せる(満月)。

三歳三か月四日 夕方、買物の帰り、三日月を発見して「あつお月様ノ」と言う。「お月様シュツ、Mちゃんの所に来たの」と言つて月の方に手を伸ばしてからそつと手の平を広げて見せる。

三歳三か月六日 夕食後「どこかへ行きたいの」と言う。ひとりでベランダに出て「ママ、」と言う。下を見降ろして「お花」と言う。小手毬の花が満開であった。

三歳三か月七日 「夕方だからお家に帰るの」日が長くなつたので外はまだ十分明るいのに買物に行つて帰つてきたせいかそう言う。

三歳四か月三日 夕方、四時前に月を見つけて「月」と言う。「もうお空がオレンジ色になつて来た」と言つて家に帰つて来る。もう外へは行こうとしない。夕食後また外へ行きたいと言う。買

物に行く。シャボン玉が買いたくて泣く。「お月様に笑われるよ」と言う。Mは「お月様は笑わないの、泣くのを、お天道様が笑うんだよ」と言う。

三歳四か月十一日 夜、雷が鳴り出すと恐がって自分の布団から母の布団へ移って来る。(雷に)「あっち行って、」と叫び、母にもそう言っていると、言う。「恐くないよ、この(布団)の中にお天道様が一杯いるから」とも言う。

三歳四か月十二日 夕方、買物に行く時甘えてだっこする。

「お天道様、ママに付いて来た」と言っていると夕陽の当っている母の背中に触る。

三歳四か月二十八日 外出の途中で母にだっこする。夕陽を見て「お天道様、Mちゃんにだっこしてるの」と言う。バスの中で三日月を見つけて騒ぎ、「どうして付いて来るの?」と言う。「Mちゃんが好きだからでしょう」と答える。

三歳五か月三日 夕方、半月を見て、「三日月」と言う。「どうして付いて来るの? どうしてかなって言って、」。「お空も付いて来る雲も付いて来る」夜、父親が外へ出て行くのを見て、「パパの所へ行く」と出て行き帰って来ると母に、「お月様も付いて来たの」と自分の後ろを指差して言う。

三歳五か月二十日 山小屋で満天の星を見る。

三歳六か月二日 バスの中で半月を見て「Mちゃんの所に一杯来たの。Mちゃんに付いて来る。(月を隠す雲を見て)雲って意地悪」と言う。

三歳六か月十五日 夕方、買物に行く道で「お天道様ここに一杯降りて来た。お月様はお家にいるの」と言う。

三歳六か月二十三日 「お日様はお家でビスケット食べてるの、お月様はお母さんというの」

三歳六か月二十四日 買物の帰り夕立に会い、「Mちゃん雨好きだよ。雨って優しい。雨とお手々つないでるの」と言っていると手の平に受ける。「お月様はお家にいるの」と言う。

三歳八か月二十日 「お星様が一杯、お山みたい」と言う。

三歳八か月二十一日 夜、裸になると布団の上を泳ぎ回り喜んで「お口の中にお天道様とお月様が一杯いるの」と言う(この頃毎晩)。

三歳八か月三十日 夜、裸になると布団の上で泳ぎ、「お口の中にお天道様とお月様が一杯いるの。この(お腹の)中に入っちゃったの」と言う。

三歳九か月五日 ハンカチを持って眠る時、母と引っ張りっこをすと言。「引っ張るとポロになっちゃうの。ポロのパンダちゃんのハンカチお山で失くしちゃったのね」と言う。「風で飛

ばされてお星様の所に行ったんでしょ」と言う。Mは、「違ふの、お天道様の所、ママのお財布はお月様の所へ行ったの。このハンカチはお星様の所に行くの」と言う。

三歳九か月十二日 朝、ペランダから陽が差し込み、Mの持っていた風船に映る。それを見て「お天道様が風船に入っちゃった」と言う。「また入れちゃった。あつ消えちゃった……」と繰り返す。

三歳九か月二十二日 坂道で三日月を見て「お星様食べたい」「お手々にとって食べたら?」「アム、食べちゃった」

三歳十か月八日 星空を見て「十条にもこんなお星様があるなんて初めてノ。パンダちゃんのハンカチお星様の所にいるの。あつ光ったノ。お星様もお月様もお天道様もお腹の中にいるの。野菜食べてるの。クッキーも、あんなに大きいお月様ノ」

三歳十一か月五日 母の布団に潜り、「この中にお日様とお星様とホットケーキが一杯いるの」と言う。

自分の二本の足で歩き始めた子どもは、足下の大地には安定や抛り所を見出しながらもその重々しい束縛から自由な存在、頭の上にあつてしかも落ちてこない天体や飛行物に大きな興味や関心

を抱くようになるのであろう。Mと月、星、太陽との出会いは、以上に記されたように、こうして二歳代のことである。飛行機が好きだというので、飛行場へ連れて行ったのも二歳二か月のこと、Mには地上にある巨大な物体が空へ上がって行くことなど思ひも寄らなかつたらしい。何度も何度も「飛び立つ」飛行機を見ては、いつも見慣れている大きさにまで小さくなると初めてあの「ヒョーキ」とわかるらしく、パッと喜びの表情を表わすのだった。

生まれてから様々な物と出会い、それらを口に含んだり手で玩んだりして、ひとつひとつ自分の世界に取り入れてきた過程は、月や星や太陽においても想像のレベルで繰返されている。私は、Mにその術を教えたわけでもないのに、何の苦もなく彼女が見事に月を食べてしまったので全く驚いたり感心したり、今も強く心に残っている。(この想像力や空想力といったものは、言葉の発達も他のすべての発達も途上にある幼ない子どもにとってだけでなく、未知の物に対しては、おとなにとっても有効で有力な武器になるといふ点で非常に重要なものだと考えたい。)

Mが太陽と一緒に走っていると言う時、頭ではそう見える理屈がわかっているけれども、そういう傍観者的な立場から一步踏み込んで、彼女と共に走ってみると、彼女の言葉は、私にとつても

内的な事実と思われ、彼女の発見や驚き、喜びがすべて私自身のものとなって、心底共感できた喜びは感動的とも言える程であった。反対に、Mが、太陽が後ろに付いて来ていると言った時、夕陽を背中に浴びながら買物に行く毎日は確かにそうかもしれないが、この日はもう暗いのだからと、頭で考えて否定した私の目には、次の瞬間、Mの悲しそうな悔しそうな顔が飛び込んで来る。

そして「失敗した」と感じている。

それまでの経過から、Mの感じ方、捉え方を尊重し、彼女の納得する表現の仕方をしようと、私は、周囲のおとなたちの気遣いから半分戸惑いながらも、夕陽が眩しいと言ったMに「お天道様が『こんにちは』って来たのよ」と答える。すると、Mは真剣になつて「こんにちは」と頭を下げる。Mと同じように全身で対応して行けば、私は彼女の感じたものにずっと近い体験ができるであろうと思いつつ、何のてらいもなく、全く自然な形でそれができるMを心からいとおしく、また誇らしい存在と感じた私である。

このような日々の関わりを通して育っていく愛情というものは、ほんのちっぽけとも思える事によって確かめられ、強化されていくのだが、私は、Mの短い言葉、詩のような表現の中にそれを見出す事が多くあった。こうしてMにとって月や星や太陽はあ

たかも母である私と同じようにいつも自分と共にいる（「どうして付いて来るの？」）親しい存在となっていく。毎夕の母と一緒にの楽しい買物の行き帰り、二人に付いて来る太陽や月は、Mが母に抱かれればそれらもMに抱かれ、Mは同時に二つの体験をしている。Mが母になつて太陽となつた自分自身を抱いていると考えるとき、Mは自分を抱いている母の気持ちと、抱かれている自分の暖かき、心地良さと同時に感じているのだと言えよう。Mは言う。太陽や月、星が家の中に、布団の中にいると。果ては口の中やお腹の中まで一杯詰まっていると。Mに付いて来た太陽や月は目には見えなくともずっとMと共にいるのだらう。一緒でない時は、友だち（よその家の子ども）のように、Mと似たような生活をしているのだ。Mが夕食時に母のいる家に帰るように。家中、布団の中、口の中、お腹の中に共通するイメージは暖かき、安全ということだらうか。そして、順次、太陽や月がMの奥深くまで取り込まれ、ついには飲み込まれてしまったことは、Mがこれら天体をすっかり、自分なりに理解し終えた事を意味していると思われる。星も月も太陽もすべてお腹の中に入れられ、それら天体が野菜やクッキーを食べているとMは言う。この時もまたMは、二重、三重のイメージを語っている。星や月や太陽となつてお腹の中にいるMは、それ程遠い昔のことではないが、Mの最も

奥深い記憶の中にある。母の胎内にいた幸福な自分を語っているし、星や月や太陽となって野菜やクッキーを食べているMは、母の手になる料理やお菓子を食べて口もお腹も満たされた最も幸福な状態を語っている。そしてまたそういう二つの状態を共に丸飲みにして抱え込んでいるという事が、Mの天体の理解や幸福のイメージの統合、完成を言い表わしている。これをおとなの言葉で一言で言ってしまうば、「しあわせ」ということになるのかもしれない。けれども、Mはまだそういう言葉を知らない。抽象的な表層のものでなく、Mがもっと具体的な生き生きとした世界に住んでおり、Mの知る限りのもので精一杯表現した結果なのである。

天体に限らず自然物に接する時、私自身、すぐに科学教育ということが頭に浮かんで、それをどう子どもに説明しようかと考えなくなる。けれどもそんな事で悩んで口をつぐんでいる時、Mはいつも自分の見方を何と素早く示してくれたことだろう。Mはいつも自分自身の目で見、耳で聴き、膚で触れ、心で感じた事をそのままの形で表現している。私はその都度、自分は心の目を開いていなかったのだと痛感させられ、彼女の言葉に行かないに首肯かざるを得ない。教えられているのはいつも私の方なのである。

山小屋で満天の星を見た時の事がMの後の星に対する興味や関

心のもとになったようだが、この時、Mがどのような思いで星を見つめていたのか私にはわからない。満天の星を見て一番喜んだのは私自身であった。都会で見える星空とは大違い、空に穴が開いたという形容がびつたり of の明るくて大きくまたたく星々、まばたきする間にも現われては消える幾つもの流れ星、いつまでも見飽きる事のない光景を、まるで子どものように感嘆の声を上げて見上げていた私であった。

夏の夜空では見られないけれども、秋、冬ともなれば都会でも美しい星空が見えるようになる。そんな夜、Mは空を見上げて、山で見た星空のようだと言ひの声を上げる。

それからは、花や虫についてその名前や生態を知りたくなるのと同様、星座や星の名前をもっと知りたくて、Mと共に私も、本を読んだり、プラネタリウムへ行ったりして情報を仕入れ、星座盤を抱えては、晴れた夜、星を探すことに精を出すようになったというわけである。こうして行動を共にしている時も、恐らく、Mと私とは興味の中心は違っていることだろう。しかし、それでいいと思っている。MはMなりに、私は私なりに、一番心魅かれるものを追い求めて行きさえすればよいのだと思う。